

ジロデ＝トリオゾン 《エンデュミオンの眠り》
—独創的な月光表現と画面に描かれた文字について—

吉岡 萌（慶應義塾大学）

新古典主義の画家アンヌ＝ルイ・ジロデ＝トリオゾン(1767-1824)はローマ留学中の1791年、奨学生に制作が課されていた裸体習作として《エンデュミオンの眠り》(1793年のサロン出品時の題名《エンデュミオン、月の効果》)を制作した。舞台設定の綿密な描写、アモルの存在、画面全体の明暗の配分や月の女神ディアナの存在を暗示する月光の特異な表現は、裸体習作というよりも、その枠組みを越えた、歴史画としての挑戦的な取り組みとみなすことができる。

本発表は、その中でも特に重要なモチーフであり、かつ、ジロデの創意が際立つ月光の表現に注目し、画面の後景に挿入された文字「AEP」との関係性を分析する。この文字に関して、先行研究ではギリシャ語と推定されるのみでその意味は見過ごされてきたが、画家は後年の作品でもしばしば主題に関連する文字を画中に挿入しており、画家の意図を無視することはできない。ジロデはダヴィッド派の画家たちに強い対抗意識を抱き、書簡によると本作品を彼らとは異なる独創的で「新しい作品」にすることを望んでいた。この描かれた文字には、そうした画家の斬新な作品への意欲が込められている可能性を指摘したい。

本作品で、ディアナは女神の姿ではなく蒸気のように柔らかな光に変身し、エンデュミオンの身体に溶け合うように表されている。この特異な光の表現は、当時「霧のような光の魔術的效果」と評された。画家の書簡によると、彼は、「純潔で名高い女神」の恋心を表すには、光のみで描くという斬新な方法がふさわしいと考えていた。先行研究では多角的な視点からこの月光についての議論がなされてきたが、この着想は、絵画伝統のみならず、画家が生涯にわたり関心を持ち続けた18世紀後半の科学の知識、特に当時大きく展開した燐光や発光などの「大気現象」の知識から得た可能性をスタフォードの研究を参照しつつ再考する。

それに基づいて、後景の文字「AEP」に注目するならば、この文字は不完全ながらも「大気や空気」と結びつく。ギリシャ語で「AEP」という単語に完全に当てはまるものは存在しないが、ギリシャ語の「大気」や「空気」は「ἀήρ (アエール)」もしくは「αέρας (アエラス)」となり、ジロデが挿入した文字とどちらも類似する。確かに「AEP」は完璧な綴りではない。しかし、後年詩人としてギリシャ語の翻訳を行うようになるジロデは、ローマの地で古代の美術・文学と学問への憧憬から、ギリシャ語を習得し始めていたと考えられる。本発表では、幼少期から高度な教育を受け、物理学にも精通していた若き画家が、ギリシャ語の「大気、空気」という意味をある程度理解し、ルキアノスを典拠とする月の女神の恋愛譚を、大気現象の知識に基づく光の表現で描くという、作品の斬新さや自身の学識を用いた複雑な構成を示すため、この文字を挿入した可能性を新たに指摘する。